

小学校外国語活動においてどのような絵本が教材として適しているか —「聞くこと」から「話すこと」へ—

木原 美樹子

Suitable Picture Books for Elementary School English Classes: From Listening to Speaking

Minako Kihara

1. はじめに

入門期の外国語学習において、絵本が教材として有効であることは、様々な文献で報告されており、世界中の教育現場で実際に使用されている（エリス&ブルースター（2008）；リーパー（2011）他）。日本の小学校外国語活動においても、現在使われている『Hi, friends! 2』には昔話絵本 *Momotaro* が取り上げられているし、補助教材として「Hi, friends! Story Books」（絵本・音声を含むデジタル教材）が開発され、研究開発学校等でその効果が検証されている。2017（平成29）年3月公示の新学習指導要領により、小学校中学年で「外国語活動」が必修化、高学年では「外国語科」として教科化され、2020（平成32）年度より完全実施される。小学校中学年の「外国語活動」では、共通教材に絵本の活用が組み込まれており、共通教材に合わせて作成された「年間指導計画例〔案〕」（文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（以下『研修ガイドブック』）32-35）に挙げられている。例えば、第3学年 Unit 9 の単元目標には、以下のように記されている。

- ・絵本などの短い話を聞いて、おおよその内容が分かる。
- ・絵本などの短い話を反応しながら聞くとともに、相手に伝わるように台詞をまねて言おうとする。

言語習得においては、まず「聞くこと」が基本であるが「聞くこと」から「話すこと」にどうつなげていくかを考える必要がある。本稿では、小学校中学年の外国語活動において、教材として適した絵本を取り上げ考察する。

2. 教材として適した絵本選びの留意点

アメリカで移民の子どもに、英語絵本を使って指導してきたリーパー（2011：35）が、絵本選びの目安として

挙げている項目を少し整理すると、以下のようになる。

- (1) リズムがあり、ライムや日常的なやさしい単語が入っていて、同じようなパターンのフレーズが繰り返し出てくる。
- (2) 表紙やタイトルが内容を表していて、テキストと絵が対応している。
- (3) 起承転結がはっきりしている。
- (4) 生活経験からあまり離れていない。
- (5) 文字やスペースが視覚的にはっきりしている。
- (6) 学習者の読む力から、あまり逸脱していない。

(1)によって、英語に特徴的な音声に慣れ親しむことができ、自然に語彙や表現を身につけることができると考えられる。(2)(3)(4)は、絵本の内容理解の助けとなる。(5)は文字の見やすさ、(6)は難しすぎないものと考えられることができる。

前述の文部科学省『研修ガイドブック』では、絵本を選ぶ際の留意点として、「指導する単元のねらいや題材、言語材料にふさわしいものを選ぶこと」が挙げられている。指導者が市販されている英語絵本の中から、指導内容に合わせて絵本を選択するためには、英語の難易度・題材・言語材料等、絵本についての情報が必要である¹。以下、上述の留意点を踏まえ、小学校の外国語活動で教材として適していると思われる絵本を取り上げ考察する。

3. 外国語活動の教材として適した絵本

3.1 テキストと挿絵

本節では、特にテキストと挿絵に注目して、外国語活動の教材として適した絵本を取り上げる。*Brown Bear, Brown Bear, What do You See?*や *Very Hungry Caterpillar* 等については読み聞かせに適した本としてよく取り上げられ、授業実践も数多く報告されている（又野（2013；2014））ため、ここではあえて取り上げない。

まず最初に Ruth Krauss 作 *The Happy Day* について述べる。表紙は背景が黄色で、動物たちが楽しそうにしている様子が描かれている。タイトルから何が「楽しい」(happy) のだろうか、と考えながら読むことになる。この絵本はテキストと挿絵が対応しており、ストーリーが分かり易い。使用されている英語表現も易しく、同じ表現が繰り返し使われている。冒頭の書き出しは次の通りである。

Snow is falling. The field mice are sleeping.

雪の中、野ネズミ (field mice) が眠っている。眠っている動物が1種類ずつ挙げられる。

the bears are sleeping,

最初の3文は現在進行形で、その後単純現在形で表現されている。

the little snails sleep in their shells;

and the squirrels sleep in the trees,

the ground hogs sleep in the ground.

以上のように sleep という動詞の文が続いている。言語習得上、単に聞き流すのではなく、少なくともおおそ意味が分かるようにして聞く方が望ましい。テキストと挿絵が対応しているため、全く英語表現を知らない場合でも、挿絵から動物たち(野ネズミ、クマ、カタツムリ、リス、グラウンドホッグ) がぐっすり眠っていることが見て取れる。雪が降る中で、静かな光景である。しかし次のページで、状況が一変する。

Now, they open their eyes. They sniff.

The field mice sniff,

動物たちが目を覚まし、においをかぐ (sniff)。動物たちは, the bears, the little snails, the squirrels, the ground hogs, と登場した順番に言及される。“sniff”の意味は、挿絵だけでは分かりづらいが、読み手のジェスチャーで児童も容易に理解可能である。次の挿絵で野ネズミが走り出す。そのページから動詞 “run” が繰り返される。

They sniff. They run.

The field mice run,

the bears run, (中略)

ここでも同様に走る動物たちに言及する。鼻をくくんしながら同じ方向に走っていく姿が、挿絵と文で描写されている。

They sniff. They run.

They run. They sniff.

They sniff. They run.

次のページで立ち止まる動物たちの視線が一点に集まっている。

They sniff. They run. They stop.

何を見ているのかは分からない。動物たちは笑ったり踊ったりしている。ここで、動物たちが何を見て喜んで

いるのか、児童に予測させることもできるであろう。次の最終ページで動物たちがなぜ集まってきたのかが分かる仕掛けになっている。冒頭からここまでずっとモノクロの絵本であるが、最後に春の訪れを感じさせる花だけが、効果的に黄色で描かれている。表紙の色と同じである。タイトルにあるように、春の訪れを喜ぶ動物たちの “the happy day” なのである²。

次に取り上げる *Rosie's Walk* は、繰り返しの表現はないが、英文が極めて少なく簡単である。登場するのは散歩をする雌鶏ロージー (Rosie) とロージーを狙うキツネである。キツネに狙われているロージーは全くキツネの存在に気づかない様子で、散歩をしている。読者はロージーがキツネに捕まってしまうのではないかとハラハラする。劇中の人物(本作品では雌鶏とキツネ)が自ら置かれた状況の中で知らないことを、読者は知っているという設定は、文学において「劇的アイロニー」(dramatic irony) と呼ばれる技法である。キツネは自分が雌鶏を追いかけけていることは分かっているが、自分に何が起るかは分かっている。ロージーは終始マイペースで歩いて行き、テキストは、淡々とロージーの歩いている場所を描写する。テキストはキツネについては一切触れず、キツネの様子はすべて挿絵で語られる。読者は挿絵からキツネに次に何が起るかを予測できる。キツネはロージーを追っていく先々でひどい目に遭い、最後はミツバチに追われ、どこか遠くへ逃げていく。ロージーは、キツネが自分を狙って追ってきていたことに全く気づかず散歩をし、最終的に何事もなく無事夕食の時間には家に戻る。この絵本では、ロージーが通った場所を表す前置詞句表現の意味を取り扱うことができる。以下が、絵本に出てくる場所を表す表現である。

across the yard

around the pond

over the haycock

pass the mill

through the gate

under the beehives

ロージーがどこをどのように通って散歩したかを見ることによって、前置詞の意味について感覚的に理解することができる。農場の地図などを作って取り上げてもよいかもしれない。登場する生き物としては、雌鶏 (hen), キツネ (fox) が中心であるが、カエル (frog), 蝶 (butterfly), 鳥 (bird), ヤギ (goat), ネズミ (mouse / mice), バッタ (grasshopper), ミツバチ (bee) 等もあり、家 (house), 木 (tree), リンゴ (apple), 梨 (pear), 卵 (egg), 花 (flower), 草 (grass) も描き込まれている。同じ表現の繰り返しはないが、文脈の中で前置詞句表現を取り上げることができ、背景に描かれている生物や自

然等日常的な語彙を扱うことができる。

以上の絵本は、小学校外国語活動における読み聞かせに適した絵本であると思われる。特に *The Happy Day* は、リーパーの指摘する絵本を選ぶ際の条件を全て満たしている。一方、それらの条件を満たしていないと思われる絵本でも、子どもたちを英語に対する興味へと導くものがある。以下に述べる歌と結びついた絵本がその好例で、それらの絵本はしばしば難易度が少し高い語彙や文法的に複雑な文を含んでいるにも関わらず、歌そのものの持つ魅力によって子どもたちを惹きつけ、高い外国語学習効果が期待できる。次節では、具体的に4つの絵本を取り上げ、その効果について考察する。

3.2 歌・リズム・押韻

絵本の読み聞かせは、児童に「聞いて分かった」という体験をさせることができる。さらに聞くことから、英語を発すること、話すことにつなげる際に、歌を利用すればよりスムーズに楽しくできるのではないと思われる。英語の歌は自然な英語のリズム、英語らしい発音を習得するのに効果的である。授業で英語の歌を扱う際に問題となるのは、どのようにして意味を教えるかである。絵カードを使ったり、ジェスチャーを使ったりという工夫があるが、歌と関連した絵本があれば、絵本によって歌の意味を把握することが容易となる。つまり絵本の読み聞かせからみて歌との関連づけは有効であるし、逆に歌の指導からみても意味の扱いにおいて、絵本との関連づけは有効である。ここでは、まず歌と関連づけた読み聞かせが可能な4つの絵本、*Today is Monday*, *Pete the Cat - I Love My White Shoes*, *Five Little Monkeys*, *Down by the Bay* を取り上げる。

Eric Carl の *Today is Monday* は、アメリカのよく知られた歌をモチーフにした、絵本である。1週間の各曜日に食べ物が組み合わされている。歌の歌詞は次の連から始まる。

Today is Monday, today is Monday,
Monday, string beans
All you hungry children
Come and eat it up.

次に火曜日であるが、遡って月曜日を繰り返す。

Today is Tuesday, today is Tuesday,
Tuesday, spaghetti,
Monday, string beans
All you hungry children
Come and eat it up.

絵本には文字で曜日と食べ物が示され、挿絵には動物とその食べ物が描かれている。動物と食べ物は、ヤマアラシ (hedgehog) とサヤインゲン (string beans), ヘビ

(snake) とスパゲッティ (spaghetti), ゾウ (elephant) とズープ (zoop)³, 猫 (cat) とローストビーフ (roast beef), ペリカン (pelican) と魚 (fresh fish), キツネ (fox) とニワトリ (chicken), 猿 (monkey) とアイスクリーム (ice cream) である。リフレインが示されているページには、インコ (parrot) が描かれている。曜日が変わると、その曜日と食べ物が加わるだけで、後は前の曜日の歌詞の繰り返しとなっている。起承転結のストーリー仕立てでもなく、面白いオチがあるわけでもないが、見開きページいっばいに鮮やかに描かれた、大きな動物と食べ物の絵が魅力的な絵本である。楽しく歌いながら、繰り返し曜日や動物、食べ物の英語表現に触れることができる。

Eric Litwin の *Pete the Cat - I Love My White Shoes* も楽しい絵本である。絵本のテキストには読み手 (ナレーター) と聞き手のやり取りが設定されている。読み手が絵本にそって読み進めれば、自然に聞き手が英語を言う箇所が用意されている。「聞くこと」から「話すこと」へ自然に導くことができる。さらに猫のピートが歌う歌を、聞き手も一緒に歌うことができる。歌と言ってもメロディーのついた簡単なフレーズ “I love my ~ shoes.” の繰り返しである。この絵本にはウェブ上に無料で利用できる音源がある。音源には、猫のピートが歌う歌だけでなく、絵本のテキストにあるナレーション的な英語も入っている。絵本を見ながらウェブの音声を聞くこともできるが、聞く前に絵本の挿絵を見ながら、ピートが新しい白い靴を履いて歩いていること、ピートはその白い靴が好きであること等、ストーリーの背景を確認しておくといわれる。ピートはお気に入りの白い靴を履いて歩いて行くが、ページをめくると、山積みになった赤いものの上にいる。最初は左ページだけを見せるとよいかもしれない。左ページには次の英語が書かれている。

Oh, no! Pete stepped in a large pile of… (ああ、いやだ。ピートは山積みの～に足を踏み入れた。)

“a large pile of” に続けて、聞き手が「イチゴ」 (strawberries) とすることになる。読み手が「靴は何色に変わったでしょう。」 (What color did it turn his shoes?) と問うと、聞き手は「赤」 (red) と答えるであろう。聞き手が「ピートは泣いた？」 (Did he cry?) と尋ねると、「いや、そんなことはない」 (Goodness, no!) となる。ピートは歩き続け、歌を歌う。「赤い靴大好き。」 (I love my red shoes.) を繰り返す。その後も同じパターンで繰り返される。行く先々で靴の色が変わり、そのたびにその色の靴が好きだとピートは言う。ポジティブな猫ピートである。途中、歌が入っており、読み手と聞き手が楽しくやり取りできるよう工夫された絵本である。

Eileen Christelow の *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* は、指遊びもできる歌の絵本である。元になっている歌詞の第1連は以下の通りである。

Five little monkeys jumping on the bed,
One fell off and bumped his head.
Mama called the Doctor and the Doctor said,
"No more monkeys jumping on the bed!"

基本的にこの4行の繰り返しである。1行目の数が“One”まで1つずつ少なくなっていく。絵本では表紙に5匹の小猿がベッドの上で楽しそうに飛び跳ねている様子が描かれている。それが絵本と歌のタイトルを表している。しかし絵本には歌にはない場面設定がある。子猿たちは寝る時間になり、その前にお風呂に入り、パジャマを着、歯を磨く。母親にお休みと言って布団に入る。小猿たちの顔から簡単には眠りそうにない様子がうかがえる。読者の予想通り、絵本のタイトルにもあるように、子猿たちはベッドの上でトランポリンのように飛び跳ねる。まるで人間の子どものようである。1匹の小猿がベッドから落ちて頭を打ってしまい、母親が医者に電話をする。医者がやってきて、「ベッドで飛び跳ねてはだめですよ。」（“No more monkeys jumping on the bed!”）と言う。しかし4匹の小猿は、またベッドで飛び跳ねる。そして、また1匹の小猿がベッドから落ちて、と同じことが繰り返される。とうとう、5匹ともがベッドから落ちて怪我をしてしまう。歌の歌詞にはないが、絵本では最後に5匹ともベッドでぐっすり眠り、ようやく母親も眠ることができるというところで終わっている。絵本では、歌の前後の場面が設定されている。ストーリーがあり、遊び感覚で歌いながら英語に親しめる絵本である。

Nadine Bernard Westcott の *Down by the Bay* も歌と関連づけた絵本の活用ができる。歌詞は少し難しいが、以下のフレーズの繰り返しである。

Down by the bay, where the watermelons grow,
Back to my home I dare not go.
For if I do my mother will say,

これに続くフレーズが例えば以下のようになっていて、韻を踏んでいる。

“Did you ever see a goose kissing a moose,
Down by the bay?”

動物についての描写が奇想天外で、分かり易い韻を踏んでいて面白い。もともと歌の動物描写にはいろいろなバージョンがあり、この絵本では、goose kissing a moose, a whale with a polka-dot tail, a fly wearing a tie, a bear combing his hair, llamas eating their pajamas と続く。他の歌のバージョンでは、以下のように様々な動物が何かと韻を踏んでいる。

a cat wearing a hat, a goat rowing a boat, a frog

walking a dog, a dragon pulling a wagon, a duck driving a truck, a goat cruising on a boat, a mouse building a house, a frog dancing on a log, a bee sipping iced tea, a fox putting on socks, a pig wearing a wig, a dog kissing a frog, a mouse building a house, a goose drinking apple juice

オリジナルで押韻を考えることもできる。学習指導要領改訂により、来年度からの移行措置期間に使用される6年生外国語科用の教材『We can! 2』では、各単元の絵本ページ STORY TIME の文章が押韻するように作られている。英語の音の面白さを味わうことができるようにする配慮であり、例えば、Unit 1 の STORY TIME は、次のようになっている。

I like cats.
We have a cat.
His name is Pat.
Where is he?
He is in the hat.
Pat, the cat, is in the hat.

ここで取り上げた絵本 *Down by the Bay* は、押韻によって成り立っている不思議な世界を提示している。その世界が挿絵から見て取れ、歌で英語の押韻を楽しむことができる。

以上のように歌と関連のある絵本は、英語自体少し難しいものもあるが、挿絵から歌の意味が視覚的に分かり易く、楽しみながら歌って英語の音に慣れ親しむことのできる教材として活用できる。

Nadine Bernard Westcott 絵の *Peanut Butter and Jelly* は、メロディーはないが押韻詩で、調子のよいフレーズが見開き2ページごとに繰り返され、英語の音の面白さを感じることができる絵本である。

Peanut butter, peanut butter,
Jelly, jelly.

繰り返されるフレーズ以外も、同様のリズムで非常に音の調子がよい。チャンツのように調子よく唱えることができる。

First you take the dough and
Knead it, knead it.

子どもたちが、テーブルいっぱい大きなサンドイッチを、一から作っていく様子が挿絵から見て取れる。作っているのはアメリカのランチの定番と言われる「ピーナツバター&ジェリーサンドイッチ」(peanut butter and jelly sandwich) である。パン生地をこねるところから始まり、ピーナツバターはピーナツを割ってつぶすところから、ジャムはぶどうをつぶすところから作っており、象がそれらの作業を手伝っている様子が柔らかいタッチで描かれている。上記のフレーズが調子よく繰り返

返される中で、挿絵とテキストが対応していて、ストーリーが理解しやすい。

絵本を使用する際に、英語が易しいものであることが条件として上げられるが、英語が難しくても絵本の挿絵とストーリーだけを借りて、指導に生かすことも可能である。絵本 *The Doorbell Rang* では、2人の子どもがお母さんの作った12枚のクッキーを分けようとしていると、次々に友だちが訪れて、1人分のクッキーの数が減っていく。英語での数の言い方を取り上げることのできる絵本である。何度も同様の英文が繰り返されるのだが、比較表現が使われており入門期の英語としては難しい。

“They look as good as Grandma’s,” said Victoria.

“They smell as good as Grandma’s,” said Sam.

“No one makes cookies like Grandma,” said Ma as the doorbell rang.

比較表現は挿絵を見れば理解できるという類いのものではない。「小学校英語実践事例 DVD」(文部科学省委託「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」)に、この絵本の日本語版『おまたセクッキー』を、小学校3年生の英語授業で読み聞かせに使っているビデオが納められている。「英語での数の言い方に慣れ親しむ」45分の授業で、最後の5分間に行われたものである。読み聞かせの中で、授業中に出てきた表現、How many ~s are there? を何度も使い、クッキーの数や、子どもの数を英語で何度も数えている。ストーリーの流れは原作絵本と同じであるが、授業者が使用していた表現は、クッキーの数以外、英語版絵本の原文とは全く違っている。その読み聞かせに児童は楽しんで参加しており、読み聞かせが終わると児童たちから拍手も起こっている。この試みは絵本の活用における新しい可能性を示している。小学校の外国語活動や外国語の授業において、絵本の挿絵とストーリーを借り、その時間に使った英語表現を何度も繰り返し聞かせることもできるのである。元の英語が難しくても、ストーリーを借りることはできる。文脈の中で英語表現を取り扱う、意味のある活動をするという点でも、この絵本の活用法は考慮すべきものであると思われる。

4. 結 び

本稿では、小学校外国語活動における、「聞くこと」から「話すこと」へとつながる英語絵本の活用について考察してきた。歌と関連する絵本は、大いに活用されるべきであると思われる。今後英語絵本は高学年の外国語科でも活用することが想定されている。小学校学習指導要領外国語の「2内容(3)①言語活動に関する事項」では、

イ読むことの言語活動例として、以下のように記されている。

(エ) 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動。

小学校では、2011(平成23)年度から高学年において外国語活動が導入され、一定の成果が認められる一方で、「聞く」「話す」という音声中心で学んだことが、中学校に上がって「音声から文字への学習に円滑に接続されていない」などの問題点も指摘されている。絵本の読み聞かせによる「聞く」活動から、絵本の読み聞かせにおける読み手とのやりとり、絵本の中の表現をまねて「話す」から、絵本の文字を認識し「読む」、絵本の文字を見て「書く」活動等、今後さらに有効な絵本の活用法を考えていく必要があると思われる。

註

- 1 エリス&ブルースター(2008)は、12冊の絵本について、文の機能や構造、語彙、発音における言語的到達目標を挙げ、合わせて授業プランも提示しており、貴重な参考資料である。松本(2017)や吉村他(2017)は、絵本リストの作成を試みている。吉村他(2017)は実際に「英語の絵本活用リスト」を作成し、ウェブ上の掲載について言及しているが、残念ながら一般公開にはなっていない。
- 2 この絵本に登場する“groundhog”は、日本人にとってはなじみのない動物であるが、アメリカやカナダで Groundhog Day(2月2日)に、この動物を使って春の訪れ時期を予想して占う行事が開かれるそうである。この絵本を元に、文化的な違いを扱うこともできる。
- 3 “zoop”とは、“soup”をもじったエリック・カールの造語である。

参考文献

- エリス, G.・J. ブルースター(2008)『先生、英語のお話を聞かせて!』松香洋子監訳、玉川大学出版部
- 又野陽子(2013)「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法-絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*を教材として-」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 43, pp. 41-50.
- 又野陽子(2014)「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法-絵本 *The Nery Hungry Caterpillar*を教材として-」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 44, pp. 81-90.
- 松本由美(2017)「小学校英語教育における教材用英語絵本選定基準の試案-絵本リスト作成に向けて-」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第10号, pp. 7-15.
- 吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子(2017)「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究」『福井県教育研究所研究紀要』第122号, pp. 122-133.
- リーバーすみ子(2011)『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房

参考資料

- 文部科学省(2011)『Hi, friends! 2 指導編』東京書籍。

- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領』
 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』
 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説外国語編』
 文部科学省 (2017) 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
 文部科学省 (2017) 『We Can! 2』東京書籍.
 文部科学省 (2017) 『文部科学省委託「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」小学校英語実践事例DVD』

本文中に取り上げた英語絵本

- Carle, Eric (1994) *The Very Hungry Caterpillar*, New York: Philomel Books.
 Carl, Eric (1997) *Today is Monday*. New York: Puffin Books.
 Carle, Eric (2007) *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*, Anniversary Edition, London: Puffin Books.
 Christelow, Eileen (1989) *Five Little Monkeys Jumping on the Bed*. New York: Clarion Books.
 Krauss, Ruth (1949) *The Happy Day*. New York: Harper Collins.
 Hutchins, Pat (2001) *Rosie's Walk*. London: Random House.
 Hutchins, Pat (1986) *The Doorbell Rang*. New York: Harper Collins.
 Litwin, Eric (2014) *Pete the Cat- I Love My White Shoes*. London: Harper Collins Children's Books.
 Westcott, Nadine Bernard (1988) *Down by the Bay*. New York: Dragonfly Books.
 Westcott, Nadine Bernard (1992) *Peanut Butter and Jelly*, New York: Puffin Books.